

# 項羽

世阿弥作

季は	地は	後	前
七月	唐土	ワキ シテ ツレ 虞美人	草刈男 渡守
		前に同じ	

「詠め暮らして花にまた。／＼。宿かる草を尋ねん。

詞 「是は烏江の野辺の草刈にて候。今日も草を刈り唯

今家路に帰り候。

下歌 「野辺は錦の小萩原。刈萱交じる烏江野に。

上歌 「草刈る男心なく。／＼。花を刈るとや思草。家  
づとなれば色々の。草花の数を刈り持ちて。帰れ  
ば跡は秋暮れて。枯野にすだく虫の音も。花を惜  
しむか心あれ。／＼。

詞 「便船を待ち向へ越さうするにて候。

シテサシ 「蒼苔路滑にして僧寺に帰り。紅葉声乾いて牡鹿鳴  
くなる夕暮。心も澄める面白さよ。

一聲 「秋毎に。野分を船の追風にて。

地 「荻の帆かくる露の玉。

「なふ／＼其船に乗らうするにて候。

シテ 「あう召され候へ。さて船賃は候。

ワキ 「我等如きの者の船賃参らせたる事はなく候。

シテ「船賃なくは此舟には叶ひ候ふまじ。

ワキ「さらば上の瀬へ廻らうするにて候。

シテ「なふ／＼道理は申しつ船に召され候へ。

ワキ「乗りおくれじと草刈は。もとの渚に立ち寄れば。

シテ「とく乗り給へとさし寄する。

地「露刈り込めて秋草の。／＼。葉毎に影宿る。月を

や船に乗せつらん。天の川。たな渡りして七夕の。たな渡りして七夕の。年に一夜は心せよ。秋風吹

けば波の音。湊に近き海士小船。水音なしに行く船の。水馴棹をさゝうよや。水馴棹をさゝうよ。船が着いて候ふ御上り候へ。

ワキ詞

「御船恐れて候。

シテ「さて船賃は候。

ワキ

「又船賃と仰せられ候ふよ。其為めにこそ向ひにて申し定めて候ふに。何とて聊爾なる事をば承り候ふぞ。

シテ「いや船賃と申せばとて。別の子細にても候はゞこそ。それ程多き草花をなど一本賜はり候はぬぞ。

ワキ「あら優しや。何れにても召され候へ。

シテ「さらば此花を賜はらうするにて候。

ワキ「不思議やな是程多き草花の中に。何とて其花をば撰つて召され候ふぞ。

シテ「さん候是は美人草と申して。故有る花にて候。

ワキ「あら面白や美人草とは。何と申したる謂にて候ふ

ぞ。

シテ「是は項羽の后虞氏と申せし人の。身を投げ空しくなり給ひしを。取り上げ土中に築き込め候へば。

其塚より生ひ出でたる草なればとて。さて美人草とは申し候。

ワキ「さらば項羽高祖の戦ひの様を。御存じ候はゞそと御物語り候へ。

シテ「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。

「さても項羽高祖の戦ひ。七十余度に及ぶといへども。始めは項羽打ち勝ち給ひ。一度も高祖の利なかりしに。ある時項羽の兵心変りし。却つて項羽を狭めつゝ。四面に鬨の声をあぐれば。虞氏は思ひに堪へかねて。いかゞはせんと伏し給ふ。又望雲雕と云ふ馬は。一日に千里を駆くる名馬なれども。主の運命尽きぬれば。膝を折つて一足も行かず。其時項羽はちつとも騒がず。馬よりしづくとおり立つて。如何に呂馬童。我首取つて高祖に捧げ。名を揚げよやと呼ばゝれども。

呂馬童は恐れて近づかず。不覚なる者の心かな。是見よ後の世に。語り伝へよと言ひあへず。剣を抜いてあへなくも。我と我首を搔き落し。呂馬童に与へ其まゝ。此原の露と消えにけり。望雲雕は膝を折り。黄なる涙を流せば。さのみ語れば我心。昔に帰る身の果。今は包まじ我こそは。項羽が幽

「靈顯はれたり。跡弔ひてたび給へ。」

(中入)

ワキ歌  
「様々に。弔ふ法の声立てゝ。ゝ。波に浮寐の夜  
となく。昼とも分かぬ弔ひの。般若の船のおのづ  
から。其纜を説く法の。心を静め声をあげ。一切  
有情。殺害三界不墮悪趣。」

後ジテ

「昔は月卿雲客うち囮み。今は樵歌野田の月。爛体

霧深し古松下の陰。」

地「苔紛々として旧名を埋む。」

シテ  
「紫の雲間よこぎる出立は。」

地「天つ乙女の調べかな。おのゝく伎楽を奏しつゝ。  
く。夢の黄楊櫛弾く琴琵琶の。四面に鬨の声を  
上ぐれば。又執心の攻め来るぞや。あら苦しの苦  
患やな。」

ツレ  
「虞氏は思ひに堪へかねて。」

地「虞氏は思ひに堪へかね給ひて。高楼に登りて。落  
つるはさながら涙の雨の。身を投げ空しくなり給

へば。

シテ  
「項羽は虞氏が別れと我身の。

地  
「なり行く草葉の露諸共に。消え果てし悲しさ。思  
ひ出づれば。剣も鉾も皆投げ捨てゝ。身を焼くば  
かりに口惜しかりし。夢物語ぞ哀れなる。

シテ  
「あはれ苦しき瞋恚の焰。

地  
「あはれ苦しき瞋恚の焰の。立ち上りつゝ味方を見  
れば。高祖に属して寄せ来る波の。荒き声々聞け  
ば腹立。いで物見せんと自ら駆け出で。敵を近づ  
け取つては投げ捨て。又は引き伏せ捻首とりぐ  
に。恐ろしかりける勢なれども。運尽きぬれば烏  
江の野辺の。土中の塵とぞなりにける。